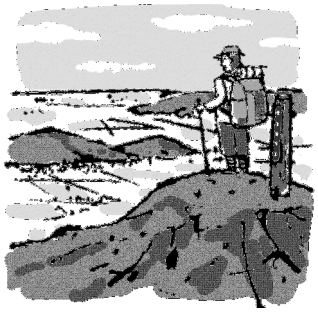
今月のテーマ　積極的に生きる

大事な物事は二段・三段構えで



え・城谷俊也

前号の「今週の倫理」では、「つねに代案を持とう」という提言を掲載しました。反対や批判をする時は、代案を示すことがより積極的な生き方であり、成長する人間とは常によい代案を提示できる人」という内容でした。

今週はその「代案を提示する積極的な生き方」を、倫理運動の創始者・丸山敏雄の生活の中に探ってみましょう。

『丸山敏雄 人と思想』は、敏雄の思想や行動について、実子である丸山竹秋が著述した書籍です。本書の第三章には、敏雄が親代わりとなった甥・悟の受験に際して、その心がけを指導した書簡が掲載されています。

この書簡について、丸山竹秋は次のように読み解いています。

実に細かく書かれてあるのだが、これらはほかならぬ敏雄自身の進学、受験の心構えであろう。『一部の方はかゝって置け』とあるところからみても、後年によく主張した物事は二段構えで」という慎重さが出ている。その学校に入るんだぞと肚を決める」とか、『ここが出来ねばあそこにする」というようなのはいけないといって、万一という場合の処置も考えておき、更に決心を固めてかかるのである。肚の決め方と慎重な手段というのは、実に矛盾するのでなくて、ひとつの道行きの両面にほかならないのだ。

引用中に「敏雄自身の進学、受験の心構え」とあるのは、広島高等師範学校を出た敏雄が、教壇に立ちながらも、大学進学を視野に入れていたことを指すと思われます。そして、実際に、37歳の時に広島文理科大学に入学したのです。

こうした代案を示す積極的な生き方は、以降、弟子たちにも大切な教えとして伝えられました。

大切な客を出迎えるために、自分の代理として弟子を駅へ向かわせた時のこと。三人で迎えに行ったにも関わらず、入れ違いになって帰ってきた弟子に対し、敏雄は以下のように述べたと、弟子の一人であった矢頭俊一が書き遺しています（『丸山敏雄言行録集Ⅱ』）。

大事なことにはすべて二段構え三段構えということがある。お客をお招きするとか、出迎えするには、かならず最上級の人を迎えるつもりで、どんなことがあっても失礼のないようにしなければだめだ。いいかげんなお招きならばやめたほうがよい。だから相手が七時に着くといってきたら、その一つ前の汽車も、一つ後の汽車もしらべて、もし何かのつごうで早くなっても遅くなっても、決して失礼のないようにするのがお迎えするものの倫理である。相手が間違えたのだからしかたがない、といってすませるようなら、お迎えにはならない。

この言葉からは、敏雄が常に二段構え、三段構えで物事に臨み、飽くなき自己成長を目指していたことが窺えます。

丸山敏雄は、与えられた人生を積極的に生きるために準備を完全にすること、代案や二段構え、三段構えも含め、想定できることには事前に対処しておくことの大切さを私たちに教え遺してくれました。こうした教えを活かし、積極的な人生を歩みたいものです。